

対象語に「が」を伴わしめる語について¹

田村すゞ子

本稿の目的

現代東京方言口語で、他動詞に「たい」taK あるいは「える」rare~e がついて希望形(例: 食べたい tabetaK)あるいは可能形(例: 食べられる taberare, 飲める nome)になると、その動作・行為の対象を表わす成分(その他動詞の目的語)が助詞「が」を伴うことがある²。また他動詞文の自動詞文化、基本文の受け身文化においても、これにやや似た現象が認められる。すなわち他動詞文、基本文において行為の対象を表わす語(目的語, 「を」を伴う)が、自動詞文、ある受け身文にはいった場合は「が」を伴う。

しかし自動詞文のパターン、受け身文のパターン、希望形・可能形のパターンは、みな構造が異なる。同じく「を」が「が」に変わると言ってもその変わり方が違うのである。自動詞文化の場合は、他動詞文で行為の対象を表わす成分(目的語)であるために「を」を伴うものが、自動詞文では

1 本稿は1970年1月31日に「早稲田大学国語学会」例会で「名詞に「が」を伴わしめる語について」という題で読んだ原稿(ただし時間の都合で §§1-4 以外はごく簡単にしか話さなかった)に加筆修正をし、注と付記を追加したものである。発表後、関連ある問題を扱った先行文献をいろいろ教えていただき、その後それらにも当たってみた。また異なる立場からの質問や反対意見をいただいたおかげで、説明を追加する必要があるところもわかった。発表の機会を与えてくださった方々、および当日の討論でご意見などをくださった方々に感謝申し上げる次第である。

田村すゞ子「日本語の他動詞の希望形・可能形と助詞」『早稲田大学語学教育研究所紀要』8 (1969) 参照。

行為の主体を表わす成分(主語)であるために「が」を伴う。受け身文化の場合は、基本文で行為の対象(目的語)であるために「を」を伴うものが、受け身文では「られる」rare~areの主体(主語)であるために「が」を伴う。希望形・可能形の場合は、その希望形動詞、可能形動詞がその行為の対象を表わす名詞句に「が」を伴わしめるのであり、この場合その名詞句は自動詞文化の場合のように行為の主体でもなければ、受け身文化の場合のように接尾辞の主体でもない。

他動詞の希望形・可能形以外にも、対象を表わす成分に「が」を伴わしめる語がかなりある。時枝誠記博士は『日本文法口語篇』(岩波、1950)で、この種の成分が「が」を伴っても主体を表わすものではないことを言われ、「対象語」「対象語格」という名称を用いられた。筆者は基本的には博士の考えに賛成である。以後「対象を表わす成分」を時枝博士に従って「対象語」と呼ぶことにする(「対象語」は「目的語」を含む)。対象語に「が」を伴わしめる語としては(1)「ほしい」(2)「できる」(3)「見える」「聞こえる」(4)「わかる」(5)「じょうず」「へた」(6)「好き」「きらい」(7)「いや」「恋しい」(8)「いる」「ある」等々があるが、「主体-が(は)+対象-が+述語」の述語の位置にこれらの語がはいった文の構造は、自動詞文や受け身文のような構造ではなく、希望形や可能形の場合のごとくであると思われる。しかしこれらの語はこういった共通点以外に、いろいろの互いに異なった職能を持っている。本稿はこれらの一つ一つの語の職能および相互間の職能の異同を明らかにしようという一つの試みである。

1. ほしい

「ほしい」はふつうその活用のしかたから「形容詞」とされている。たしかに「ほしい」の活用(語尾、交替規則)はふつうの形容詞と同じである。また文中における職能を見ても、「とても」「非常に」などの程度の連用修飾語に修飾される点、「...より...のほうが——」「...がいちばん——」などの比較のパターンにはいれる点など、形容詞的な職能を持っている。しかし一方「ほしい」はふつうの形容詞と違った職能も持っている。たと

えば

- (1) 来週までにほしい。
- (2) なるべく早くほしい。

「来週までに」「なるべく早く」というような修飾語は、ふつうは動作やできごとを表わす動詞(句)に関係するものであって、形容詞を修飾するものではない。

このような二種の職能を合わせ持つ点で「ほしい」は他動詞の希望形「...たい」に類似している。実際例1,2のような文は

- (3) 来週までに買いたい。
- (4) なるべく早く買いたい。

のような文と平行的である。例3,4の構造は

- (3)' [来週までに——買い] たい
- (4)' [なるべく早く——買い] たい

と思われる。従ってそれと平行的な例1,2は

- (1)' [来週までに——○] たい
- (2)' [なるべく早く——○] たい

という構造を持っており、○-たい=ほしい なのだと考えればよさそうである。

次に

- (5) 水がほしい。

における「水」と「ほしい」の関係は

- (6) 水が冷たい。

における「水」と「冷たい」の関係とは違い、言うまでもなく例6における「水」は「冷たい」に対する主語であるが、例5における「水」は「ほしい」に対する対象語である。このように「ほしい」は対象語をとるという点でもふつうの多くの形容詞と異なり動詞的であり、その対象語が「が」を伴うという点でも「ほしい」は他動詞の希望形と同じである。

例5は「ほしい」の代わりに他動詞の希望形のはいった文、たとえば

(7) 水が飲みたい。

と平行的である。例7における「水」は「飲む」の目的語であり、「飲む」に「たい」がついて希望形となると、その希望形「飲みたい」が「飲む」の目的語に「が」を伴わしめるのである。

(7') 水-を——飲む
 || ||
 水-が——[飲み-たい]

そこでこれと平行的な文例5も

(5') 水-を——○
 || ||
 水-が——[○-たい] ただし ○-たい=ほしい

のような構造を持っていると考えればよさそうである。

早大国語学会で発表したとき“「ほしい」や「...たい」が「が」をとると言ってもそれは短い文脈の中で、しかも主語が1人称の場合であって、主語が3人称で「ほしがる」「...たがる」となった場合は「を」をとるではないか”という反論が出た。文脈によっては「を」が現われやすい場合があるという事実は、すでに松村明教授の“「水を飲みたい」という言い方について”(1951、『江戸語東京語の研究』(1957)所収)の中で指摘されており、筆者の“日本語の他動詞の希望形・可能形と助詞”の中でも多少はこれに触れたが、まだ不明の点が多く、どう理論づけるかについては今後研究を要する。「ほしがる」「...たがる」はまた別の問題である。「がる」がついた場合に対象語が「を」をとるのは「ほしい」や「...たい」のせいではなく「がる」のせいである。つまり他動詞「ほしがる」「...たがる」が目的語に「を」を伴わしめるのである。「ほしい」「飲みたい」に「がる」がついて「ほしがる」「飲みたがる」になった段階では、対象語に「が」を伴わしめるという「ほしい」「...たい」の性質はもう作用しないから、「がる」はいま問題にならないのである。なお「ほしい」を使うか「ほしがる」を使うかは主語の人称によって決まるわけではない。「ほしい」が1人称の主語と共に用いられやすいのは、主体の心情を表わすというこの語の意味によるのであり、「ほしがる」が3人称の主語

と共に用いられやすいのは「...がる」が「...という気持ちをしきりに表現する」というような、行為を客観的に表わすものだからである。後述の「うれしい」「こわい」などについても同様。このように、意味の適合・不適合によって起こる事実と、ヨーロッパ語の人称の呼応のように単に文法的である事実とは別のことである。

「ほしい」の対象語は「が」の代わりに「を」を伴う場合もある。

(8) 水をほしい。

(9) その機械を来週までにほしい。

こういったことも「ほしい」を意味《所有する、手に入れる》だけがあって形のない他動詞の希望形「○-たい」だと考えれば説明がつく。

ただ例8,9のような文は、実在の他動詞の希望形、たとえば「飲みたい」「買いたい」を用いた文

(10) 水を飲みたい。

(11) その機械を来週までに買いたい。

に比べると多少舌足らずのような感じがする。これは、実在の他動詞は「水を飲む、飲んだ、飲もう、etc.」「その機械を来週までに買う、買おう、買え、ect.」のように、「目的語-を」のあとに置かれて使われる場合がたくさんあるのに、仮定上の他動詞「○」は、「たい」を伴って現われる以外に用いられることがないという事実による、と説明できるから、「ほしい」を「○-たい」とする仮説を否定することにはならない。実際の会話を聞いていると、「...をほしい」という言い方はずいぶん頻繁に用いられている。またたとえば

(12) 太郎が花子をほしいんだ。

のような文には、違和感はないと言ってよいのではなかろうか。この場合「花子」が定石どおり「が」を伴うと、主語「太郎」と対象語「花子」の両方に「が」がつくことになる。そういうパターンも可能ではある：

(13) わたしが水がほしいんだ。

しかし「水」はモノ(無情物)だからほしいと思っている主体でないことが

明らかだが、「太郎」と「花子」は両方ともヒト(有情物)であるからほしいと思っている主体とも対象ともなり得る。こういう状況下では主体のほうが太郎で対象のほうが「花子」だということをはっきりさせるために「花子が」を「花子を」と言いかえることができるのである。そしてこのような必要がある場合は主語が言い表わされなくても

(14) 花子をほしいんだ。

のように対象語が「を」を伴うことができる。またこうすれば主語と対象語の順序が逆であっても誤解は起こらない:

(15) 花子を太郎がほしいんだ。

このように「ほしい」の対象語が場合によっては「を」を伴うことがあるということも、「ほしい」を他動詞の希望形と見なすことの一つの助けとなる。「...をほしい」と例えば例8,9「水をほしい」「その機械を来週までにほしい」の構造は「...を...たい」(たとえば例10,11)の構造と平行して考えることができる:

(10') [水を——飲み] たい

(8') [水を——○] たい

(11')

| | | | | | | |
|---|---------|---|---|----|---|------|
| [| その機械を—— |] | [| 買い |] |] たい |
| | 来週までに—— | | | | | |

(9')

| | | | | | | |
|---|---------|---|---|---|---|------|
| [| その機械を—— |] | [| ○ |] |] たい |
| | 来週までに—— | | | | | |

なお「ほしい」は動詞の -te form のあとに置かれる、いわゆる補助用言としての用法も持つ。そしてこの場合には「...てほしい」と「...てもらいたい」との間に上と同じ平行関係が成り立つ。たとえば

(16) 彼にうちへ来てもらいたい。

(17) 彼にうちへ来てほしい。

の構造は次のように平行的に考えることができる。(補注)

(16')

| | | | | | | |
|---|---------|---|---|-----|---|------|
| [| 彼に—— |] | [| もらい |] |] たい |
| | うちへ来て—— | | | | | |

ば「飲める」は

- a. 対象語（「飲む」noM の目的語）がふつう「が」を伴う：お酒が飲める。
- b. 主体を表わす成分が「に」を伴うことがある：わたしにも飲める；彼に飲めないもの。
- c. 可能形を作らない：*飲められる。
- d. 希望形を作らない：*飲めたい。
- e. 命令表現がない：*飲めろ，*飲めなさい，*飲めてください。
- f. 意志表現がない：「飲めよう」「飲めましょう」で意志《I'll...，let's...》を表わすことがない。

特徴 a は他動詞の希望形（例：飲みたい）も、また他のいくつかの語も持っている。b は後述のように他のいくつかの語も持っているが、対象語に「が」を伴わしめる語のすべてが持っているわけではない。希望形もこの特徴は持っていない。なお主体を表わす成分が「に」を伴う場合と「が」を伴う場合とでは意味が多少異なる。従ってこの二つの場合はパターンが違うと見られ、optional と言ってすませることはできない。例 78 のような場合「先生」が「に」を伴いにくいというような事実もある。さて特徴 c は可能形にさらに可能形語尾がつかないというだけのことで、意義上極めて自然である。特徴 c—f は主体が inanimate の場合はどんな動詞にも当てはまる。従って inanimate の主体しか主語にとらない動詞ならみなこの特徴を持つ（例：（戸が）あく，しまる）。しかし戸を擬人化して言う場合ならば「あける」《あくことができる》、「あきたい」「あけ」なども不可能ではない（「開けゴマ！」のように）のに対し、可能形の場合は何をどう擬人化してもこれが不可能である点、つまり前者が語義的不可性であるのに対し後者が文法的不可性である点、注意すべきである。

「できる」が他動詞の可能形と共通の職能上の特徴を持つ一方、「する」という動詞が可能形を作らないという事実がある。その穴をちようどうめるものがこの「できる」なのである。「する」対「できる」の関係は、意

味上も職能上も、「飲む」対「飲める」、「買う」対「買える」などの関係とほとんど平行しているのである。従って、すでに「日本語の他動詞の希望形・可能形と助詞」(1970, 本稿の注 2) で述べたように

(18) スケートができる

の構造は

(19) お酒が飲める

の構造と平行的に考えることができる：

(19') お酒-を——飲む
 || ||
 お酒-が——[飲む-える]

(18') スケート-を——する
 || ||
 スケート-が——[する-える]

ところが「する」と「できる」の職能上の関係は、他動詞とその可能形の関係と完全に平行しているとは言えないのである。「飲める」の対象語は場合によっては「を」を伴うこともある。「できる」の対象語も場合によっては「を」を伴うこともなくはないが、これはふつうの他動詞の可能形に比べるとはるかにまれである。もっと決定的なことは「お——になる」という型の尊敬表現を作るのにふつうの他動詞と可能形語尾「える」の組み合わせでは「お飲みになれる」「お買いになれる」のように、まず他動詞が「お——になる」のパターンにはいり、その次に「える」がつくのに対し、「する」「できる」の場合は「おできになる」と言って「する」と「える」が結合した後にこれが「お——になる」のパターンにはいる(×「おしになれる」とは言わない)のである。つまり「できる」は「する」の可能形の穴をうめるものではあるけれども、ふつうの可能形よりも「する」と「える」が早い段階で結びつき、従って結びつきがたいと言えることができる。

「できる」には「する-える」ではないものもある。

(20) あの子は(国語・勉強が)よくできる。

(21) 駅前にパチンコ屋ができた。

例20の「できる」は可能の意味を持つが、しかしこれは「する-える」ではなく、全体で《成績がいい》ことを表わすものであり、§5の「じょうず」「とくい」などを通ずる。例21の「できる」は可能の意味を持たない単純な自動詞で、意義上「作る」と関係する(他動詞「作る」に対する自動詞の穴をうめる)ものである。正規の他動詞の可能形の場合にも、それと同形の自動詞が存在することはよくあることである。

(22) 練習してじょうずに切れるようになった。(「切れる」は「切る」の可能形)

(23) この糸はすぐ切れる。(「切れる」は可能形である場合もなくはないがふつうは他動詞「切る」に対する自動詞)

もっともこの二つの「切れる」の意味には、「切る」の部分だけに帰せられないほどの近さが感じられる。これは「切る」に接尾した可能形形成接尾辞と自動化接尾辞の二つのeがいずれも可能の要素を含んでいるからであろう。なお筆者は「切る」(他)対「切れる」(自)の類を奥津敬一郎氏のように両極化³とは見ない。1955年東大文学部言語学科の服部二郎教授の演習のレポートで筆者が行なった調査によると、五段活用⁴の他動詞は可能形と同じ形にすることにより《ひとりでに...する》という意味の自動詞として使われることがある(例: わざと書いたんじゃない。自然に書けちゃったんだ)。しかし逆の方向の類推は起こらない。従ってこの類の対は他→自の方向の派生、eは自動化接尾辞と見られる。「あく」「あける」の類の場合は逆に自→他の方向の派生で、eは他動化接尾辞と見るべきである。同じ形のものが自動化と他動化の両方に使われるということはこの解釈の妨げにはならない。アイヌ語にも語根に接尾して自動詞を形成する接尾辞と他動詞を形成する接尾辞の両方のkeがある。例: ray (自)《死ぬ》, ray-ke (他)《殺す》; kom-o (他・単), kom-pa (他・複)《折り曲げる》, kom-ke (自)《折れ曲がる》(沙流方言など)

3 奥津敬一郎 “自動化・他動化および両極化転形——自他の対応”『国語学』70 (1967).

3. 見える, 聞こえる

「見える」「見ることができる」, 「聞こえる」「聞くことができる」も可能の意味を持ち, しかも前述のようなふつうの他動詞の可能形が持つと同じ職能上の特徴を持っている:

- a. 対象語がふつう「が」を伴う: あの星が見える; 先生の声が聞こえない。
- b. 主体を表わす成分が「に」を伴うことがある: わたしにも見える; 彼に聞こえないこと。
- c. 可能形を作らない: *見えられる, *聞こえられる。
- d. 希望形を作らない: *見えたい, *聞こえたい。
- e. 命令表現がない: *見えろ, *聞こえなさい, *聞こえてください。
- f. 意志表現がない: 「見えよう」「聞こえましょう」という形で意志を表わすことがない。

だから「見える」「聞こえる」も何かある他動詞の可能形と考えることができるかと都合がよい。

「見える」「聞こえる」と形の上で関係があり意味上も結びつけられそうな他動詞は「見る」「聞く」である。しかし「見る」「聞く」には規則的な派生法によって作られる可能形「見られる」「聞ける」がある。そこで「見られる」「聞ける」の用法がふつうの他動詞の用法と平行しているかどうかを調べてみると:

(24) 海老蔵が見たかったら今月歌舞伎座へ行けば見られる。

(25) アルゼンチンタンゴが聞きたかったら Nさんのうちへ行けば聞ける。

(26) きょうは久しぶりにいい芝居が見られてしあわせだった。

(27) きょうはすばらしいレコードが聞けてしあわせだった。

この用法はふつうの他動詞の可能形の用法と平行している:

(28) おいしいコーヒーが飲みたかったら Kさんのうちへ行けば飲める。

(29) 安くていいオーバーが買いたかったらいま T デパートの 7 階に行けば買える。

(30) きょうは久しぶりにおいしいコーヒーが飲めてしあわせだった。

(31) きょうはとってもすてきなオーバーが買えてしあわせだった。

しかし一方、ふつうの他動詞の可能形が用いられるのと平行した文脈で、「見られる」「聞ける」が使えない場合がある：

(32) このお茶は熱くてわたしには飲めない。

(33) この肉はかたくてわたしにはかめない。

(34) 歯を治したら肉がかめるようになった。

(35) 薬を飲んだら何でも食べられるようになった。

(36) *黒板の字は小さくてわたしには見られない。

(37) *彼の声は小さくてわたしには聞けない。

(38) *めがねをかけたら黒板の字が見られるようになった。

(39) *前列に坐ったら彼の声が聞けるようになった。

例 36-39 のような文脈では「見られる」「聞ける」の代わりに「見える」「聞こえる」が用いられるのである：

(40) 黒板の字は小さくてわたしには見えない。

(41) 彼の声は小さくてわたしには聞こえない。

(42) めがねをかけたら黒板の字が見えるようになった。

(43) 前列に坐ったら彼の声が聞こえるようになった。

一方先の例 24-27 のような文脈では「見える」「聞こえる」は使えない：

(44) *海老蔵が見たかったら今月歌舞伎座へ行けば見える。

(45) *アルゼンチンタンゴが聞きたかったら N さんのうちへ行けば聞こえる。

(46) *きょうは久しぶりにいい芝居が見えてしあわせだった。

(47) *きょうはすばらしいレコードが聞こえてしあわせだった。

つまり他動詞の可能形が続く用法を「見られる」「聞ける」も「見える」「聞こえる」も持っているけれども、他動詞の可能形が使われるような文

脈のうちある種のものにおいては「見られる」「聞ける」が用いられて「見える」「聞こえる」は用いられず、他の文脈においては「見える」「聞こえる」が用いられて「見られる」「聞ける」は用いられないのである。このことは次のように解釈できよう。

ふつうの動詞の可能形は、動詞の意義素に加えて可能形語尾「える」rare~e の意義素を持っている。たとえば「飲む」noM の意義素は「飲む」noM の意義素と「える」e の意義素の合計をそっくり持っている。ところが「見られる」「聞ける」は、形の上で「見る」「聞く」の可能形としての資格を完全に備えながら、「見る」mi,「聞く」kiK の意義素と「える」rare~ e の意義素の合計そっくりは持っておらず、その一部を「見える」「聞こえる」にゆずっている。言い換えればふつうの動詞の場合は一つの可能形が持っているものを「見る」「聞く」の場合は「見られる」と「見える」,「聞ける」と「聞こえる」のそれぞれ二つが分担しているのである。

それでは「見られる」「聞ける」と「見える」「聞こえる」との意義素の違いはどこにあるのであろうか。

上にあげた例から推すと「見える」「聞こえる」は視力、聴力に関係があるらしい。視覚の能力の限界を越えないのが「見える」、聴覚の能力の限界を越えないのが「聞こえる」であるらしい。実は限界を越えるか越えないかは、その人の視力、聴力の強弱によるばかりではなく対象物の大きさや強さ、あるいは障害物や雑音といった、周囲の状況による場合もある。しかしとにかく視力、聴力の点から見て可能であるのが「見える」「聞こえる」だということになる。

これに対し「見られる」「聞ける」の場合は、視力、聴力に無関係で、何か外的な事情や都合その他何によってでも、「見る」「聞く」という行為を行なうことができるということである。ここでは「見る」「聞く」は主体が意志をもって行なう行為としてとらえられている。「見える」「聞こえる」においては「見る」「聞く」は対象を視覚、聴覚に受けるというだけである。

一般の動詞、たとえば「飲む」の場合は、主体の能力の範囲内でまにあらうというの（例 32）能力に無関係に外的事情や都合その他によって主体がその行為を行なうことができるというの（例 28, 30）「飲める」である。なかには「かめる」（例 33, 34）のように能力に関したことに用いられるのがふつうであるものもあるが、しかしこの「かめる」も、特殊な状況を設定すれば外的事情や都合による可能性に用いられることもあり得る：

(48) うるさい先生が休みだからきょうは授業中にガムがかめる。

結論としては、一般の動詞の可能形は一つの基本形に対して一つであるのに、「見る」「聞く」の可能形はそれぞれ二つずつあり、意味によって使い分けられているのである。

「見える」「見ることができる」、「聞こえる」「聞くことができる」を「お——になる」型の尊敬表現にするときには「ごらんになれる」（黒板の字がごらんになれますか）、「お聞きになれる」（彼の声がお聞きになれますか）となって、「見られる」「聞ける」に対する尊敬表現と合流してしまう（「彼の声がお聞こえになりますか」「黒板の字がお見えになりますか」も、言わなくもないようであるがなんとなく違和感がある）。このことも上の仮説の支えとなる。

4. わかる

「わかる」も可能の意味を含み、他動詞の可能形が持つ職能上の特徴の一部を持っている：

- a. 対象語がふつう「が」を伴う：英語がわかる。
- b. 主体を表わす成分が「に」を伴うことがある：わたしにもわかる、彼にわからないこと。
- c. 可能形を作らない：*わかるる《わかることができる》。
しかし特徴 d—f は「わかる」には当てはまらない：
- d. 可能形は希望形を作らないが「わかりたい」は可能。
- e. 可能形は命令表現がないが「わかってください」は可能。
- f. 可能形は意志表現がないが「わかろうとしない」などの文脈では

「わかるう」も可能。

これら d—f の場合は意味上も《理解することができることを希望する》《理解することができるようにと頼む》《理解することができるべく努力しない》のように可能の意味を表わさず、「わかる」は《理解する》ことだけを表わしている。職能上も対象語が「を」を伴いやすく、特に e, f の場合はまず「が」を伴うことはないと思われる。d の場合は「が」も「を」も伴い得る(彼の言うことがわかりたい、彼の言うことをわかりたい)が、この場合「が」は「...たい」によって「わかる」の目的語に伴わしめられたもの(つまり「わかる」のせいではない)と見ることができる。

結局「わかる」は他動詞の可能形としての面と他動詞の基本形としての面の二面を持つと見ることができ、従って一般の他動詞には基本形とそれから派生した可能形とが区別されているのに対して「わかる」においては両形が中和している、と解釈することができよう(「わかる」においては基本形と可能形が同形である、つまり可能形語尾がゼロである、という解釈もできそうだが、いずれの解釈のほうがよいかまだ結論を出すに至らない)。

§§ 2-4 をまとめて表にすると：

| | 基本形 | 可能形 |
|---------|---------|---------|
| 一般の他動詞 | 食　　べ　　る | 食べられる |
| | 飲　　　　む | 飲　　め　　る |
| | 買　　　　う | 買　　え　　る |
| す　　　　る | す　　　　る | で　　き　　る |
| 見　　　　る | 見　　　　る | 見られる |
| | | 見　　え　　る |
| 聞　　　　く | 聞　　　　く | 聞　　け　　る |
| | | 聞　こえる |
| わ　　か　　る | わ　　か　　る | |

これはこれら諸形式を「他動詞の基本形と可能形」という観点から見て整理したもので、各形式の持つ全機能および意味の体系がこれで行き渡っているというわけではない。たとえば「見える」には「林も小川もあるし海も見える。」「町のあたりが小さく見えてきた。」のように「ある」「現われる」などの自動詞の仲間と考えられる用法もある。「聞こえる」も同様である。早大国語学会で発表したとき、「見える」は他動詞「見る」に対する自動詞であり、可能の「られる」がついたものは「見られる」だという反論が出た。形の上で「見る」に「られる」がついたものは「見られる」だということも、「見る」「見える」にふつうの他動詞・自動詞の対に平行した用法がたくさんあることも、いままで述べて来たとおりの筆者は認めているのである。しかし「見える」「聞こえる」の用法が「見る」「聞く」に対する自動詞としてのそれだけではなく、対象語に「が」を伴わしめる語としての用法もあるということ、そして「見られる」「聞ける」だけではおおいっくしていない「見る」「聞く」の可能形の用法が、「見える」「聞こえる」によって補われているということは、無視できない事実なのである。筆者は形の上の規則性でなく用法(機能、意味)を問題にしているのである。

5. じょうず、へた、とくい、にがて、うまい《じょうず》

これらの語も可能の意味を含んでおり、また可能形の持つ機能上の特徴 a を持っている：

a. 対象語がふつう「が」を伴う：

(49) 彼はスキーがじょうずだ。

(50) 彼は字がへただ。

(51) 彼は暗算がとくいだ。

(52) 彼は体育がにがてだ。

(53) 彼はしょうぎがうまい。

しかしこれらの語は特徴 b は持っていない。つまり主体を表わす成分が「に」を伴うことはない(*わたしにじょうずだ。*彼にとくいなこと)。

特徴 c 以下は動詞に関してのみ問題になることがらである。「じょうず」「へた」「とくい」「にがて」は形容動詞、「うまい」は形容詞の活用をし、またこれらの語は「とても」「非常に」などの程度の連用修飾語の修飾を受けるとか「...より...のほうが——」「...がいちばん——」などの比較表現のパターンにはいることができるというような、主に形容詞、形容動詞、ある種の副詞が持つ職能を持っている(“主に”と言うのはこれらの職能は形容詞、形容動詞、副詞以外の語にもあるからである。「右」「左」「前」「あと」など、名詞の中にもこの職能を持つ下位クラスがあるし、動詞でも「とてもやせてる」「A より B のほうがふくれた」などの用法もある)。

またこれらの語においては、対象語が「を」を伴うことはない(×スキーをじょうずだ。×体育をにがてだ)。

このように、可能の意味を含む点、対象語に「が」を伴わしめる点を除けば、これらの語は動詞の可能形とはかなり違っているのである。

§2 で述べたように、可能の意味を持つ「できる」に「する」の可能形に相当すると見なすことが無理なものがある(例:彼は国語(理科・勉強)ができる)。「国語ができる」の「できる」はひとまとまりで《成績がいい》ことを表わし、「じょうず」「とくい」などと意味上似通っている。この「できる」「成績がいい》においては、主体を表わす成分が「に」を伴うこともなく(「彼に国語ができる」「彼にできるのは国語だけだ」などと言うのは、彼の国語の成績の話ではなく、国語のテストの問題をとくこととか、何か国語関係の仕事をするのが話題になっている場合であろう)、また対象を表わす成分が「を」を伴うこともないようである(「国語をできる」「勉強をできる」はまれだがもし言えば《成績がいい》ではなく《...することができる》のほうになる)。これらの点からみて「できる」「成績がいい》は「じょうず」「へた」の仲間に入れてよさそうに思われる。

「とくい」には上に述べたもののほかに、《...を誇らしく思う》ことを

表わす「...する(した)ことがとくいだ」という用法がある(例: 彼はこんどの試合で優勝したことがとくいなんだ)。これは意味上からも職能上からも後述 §7 の「いや」「うれしい」などの仲間と認められる。この「とくい」《誇らしく思う》においては、「...がとくいだ」(…優勝したことがとくいだ)というパターンから「...をとくいがる」(…優勝したことをとくいがる)というパターンを作ることができる。「じょうず」「へた」「とくい」《よくできる》「にがて」「うまい」《じょうず》などは心情を表わさず状態を客観的に見て表わす形式だから当然のことながらこの職能はない(*スキーをじょうずがる; *字をへたがる)。心情を表わす形式ならば、「いや」「うれしい」(いやがる, うれしがる)などの類ばかりでなく「ほしい」「...たい」(ほしがる, ...たがる)でも、また対象語をとらない形容動詞(暑がる, きたながる)でもよく「がる」がつくのであるが、形容動詞の場合はかなり制限があり、「いやがる」「迷惑がる」は言うけれど *「好きがる」「*きらいがる」「*元氣がる」「*しあわせがる」などとはふつう言わない。従って「とくい」《じょうず》には「がる」がつかず「とくい」《誇らしく思う》には「がる」がつくことは、単に意味の問題であるだけでなく、職能上の特徴でもあると言わなければならない。

6. 好き, きらい, 大好き, 大きらい

これらは意味上「好悪」という共通の特徴を含んでいる。そして対象語に「が」を伴わしめるという職能上の特徴もある: あの人(花, 甘いものが好きだ。)

これらの語においては、主体を表わす成分が「に」を伴うことはない: *わたしにはあの人(花, 甘いもの)が好きだ。 *彼にきらいなもの。

これらの語は形容動詞の活用をし、また「とても」などに修飾され、「...より...のほうが——」「...がいちばん——」などの比較表現のパターンにはいることができる。

このような点でこれらの語は前節の「じょうず」「へた」等々と似ている。

しかし「好き」「きらい」「大好き」「大きらい」の場合は対象語が「を」を伴うことがある。これは

(54) 太郎が花子を好きなんだ。

(55) だれがだれをきらいなの？

のように、主体も対象もヒト(有情物)である場合に著しく、その名詞句が主語ではなく対象語であることをはっきりさせる必要がある場合に、対象語に「を」をつけるのだと考えられる。この点でこれらの語は前節の諸語とは大きく異なり、§1の「ほしい」といくぶん似ている。主体の心情を表わすという意味の点でもこれらと「ほしい」には通うところがある。しかし「ほしい」と違って、ふつうは動詞を修飾するような修飾語に修飾されることはない。

「好き」「きらい」の形態的基礎になるものとして動詞「好く」「きらう」がある。しかし「大好き」「大きらい」は「好き」「きらい」にさらに「だい」が接頭したものであり、「大好き」「大きらい」の直接の形態的基礎になる動詞はない。「好き」「きらい」と平行的な形の派生は他の数多くの動詞からの派生名詞に見られるけれども、職能上意味上は平行的ではない。従ってこれらの4語は、上記のような職能上の特徴を持った一群の語、とするべきものである。

7. いや、恋しい、なつかしい、うれしい、悲しい、楽しい、おもしろい こわい等々

ある種の心情を表わす一群の形容詞や形容動詞が、対象語に「が」を伴わしめるという職能上の特徴を見せている。

(56) わたしはあの人がいやだ。

(57) わたしはゆうべのパーティーがほんとに楽しかった。

(58) わたしはあの映画がとてもおもしろかった。

(59) わたしは犬がこわい。

このうち「いや」「恋しい」「なつかしい」「こわい」などのように有情物を対象語として取り得る語においては、対象語が「を」を伴うこともあ

り得る。

(60) 太郎が花子をいやなんだ。

(61) だれがだれをこわいの？

しかしこのグループの語の場合、対象語が「を」を伴うと、§6の「好き」「きらい」の場合よりもいっそうしっくりしない感じがする。むしろ例 60, 61 の代わりに「太郎が花子をいやがってるんだ」「だれがだれをこわがってるの？」などのような別の、対象語（目的語）が正当に「を」を伴い得る形式を使って言うほうがふつうであろう。「がる」のつかない「好き」「きらい」に比べてこういう言い換えが簡単にできるところに、例 60, 61 のような文の逸脱感を生じさせる原因があると思われる。

一部の語においては心情の主体を表わす成分が「に」を伴うことがある。

(62) わたしにはゆうべのパーティーがほんとに楽しかった。

(63) わたしにはあの映画がおもしろかった。

(64) わたしには犬がこわい。

このグループの語においては「...に」はたいてい「...にとって」と言いかえられる。そして心情を持つ主体はもはや主語ではなくなり、心情の向けられる対象のほうが主語になる場合も多い。そうなるとちょうど

(65) わたしには英語の試験がとてもむずかしかった。

と平行的になる。このことは次のような語順の場合にいっそうはっきりする。

(66) ゆうべのパーティーが(は)わたしにはほんとに楽しかった。

(67) あの映画が(は)わたしにはおもしろかった。

(68) 犬が(は)わたしにはこわい。

中でも特に「おもしろい」「こわい」は

(69) おもしろい映画だ。

(70) こわい犬だ。

のように心情を持つ主体をまったく問題にせずに使われることもある。こ

の場合「おもしろい」「こわい」は単純な(「長い」「大きい」などのような属性を現わす)形容詞と同じ働きをしており、「映画」「犬」はおもしろさ、こわさの対象ではなく主体である。このことは

(71) こんどの映画はおもしろいよ。

(72) こんどの先生はこわいよ。

のような述語の位置での使い方においても同様である。

なおこのグループの中の一部は、対象を問題にせず主体の気持ちだけを問題にする場合にも用いられることがある。

(73) わたしはきょうなんだかととても楽しい。

(74) わたしはなんとなくこわい。

その場合は主体を表わす成分は「に」を伴わないこと、黒田成幸氏が“「ガ」「ヲ」及び「ニ」について”『国語学』63 (1965)] の p.79 で指摘されたとおりである。ただしそこで黒田氏が「私は恐わい」においては「私には恐わい」とは違って“恐わさの対象を問題とせず感情だけが問題とされている”と言われたのは言いすぎで、「私には恐わい」と言えばたしかに必ず対象があると決まっているけれども、「私は恐わい」のほうは対象がないとは限らず、対象のある場合もあると思う：

(75) わたしは(犬が)こわい。

このグループの形容詞、形容動詞は、対象語をとり得ることから、他動詞や他動詞からの派生形に多少とも似通った感じがする。しかしこれらは実際にせよ 仮定上にせよ 何らかの他動詞の派生形とすることはできない。黒田成幸氏が前掲論文で「私が...A い。」の中にはめこまれた副文を「私がそれを恐わがる」として、実在の動詞「こわがる」を持ち出されたことには賛成できない。「こわがる」は「こわい」(kowaK) に非常に生産的な接尾辞「がる」(gaR) がついてできた他動詞である。

「ほしい」が仮定上の他動詞の希望形だというのは、「ほしい」がほかのたくさんの「他動詞-たい」と同じ職能を持つからである。「できる」が「する-える」だというのは、「する」と「できる」の職能上の関係がほか

のたくさんの他動詞とその可能形の関係と平行的だからである。また本稿では扱っていないが筆者が執筆者の一人になっている早稲田大学語学教育研究所編『外国学生用日本語教科書初級』(リコピー版 1965, 活字版 1967)以来「ある」の否定形を「ない」とし、この「ない」を「ある」とは別個の形容詞とは見ない理由も、「ある」と「ない」との関係が他の無数の動詞とその否定形の関係と平行的だからである。ところが「いや」「恋しい」「ありがたい」「こわい」等々においては、ほかの他動詞やその派生形に同じ機能のものもなく、平行的な機能上の関係も認められないのであるから、これら一群の語は何かの派生形とすることはできないし、またそうする必要もないのである。

8. いる(必要), ある(所有)

(76) わたし(に)はお金がいる。

(77) わたし(に)は弟がある。

における「いる」「ある」も対象語に「が」を伴わしめる語であるが、両者ともこれまでにあげたどのグループにも入れることのできない特殊なものである。なお所有を表わす「ある」を認めず「ある」は存在を表わすだけだと見る人もいる。たとえば国広哲弥“日英両語のテンス”[『構造的意味論』(三省堂, 1967)] p. 51 では『例解国語辞典』の“③持っている”という記述を批判して“これは問題で、やはり「存在する」という意味であろう。”とあり、p. 53 には「彼ニワ子供ガ3人アル」を「賛成者ガアル」「居眠リシテイル人モアルシ愉快ニシャベッテイル人モアル」などと同一の用法として並べてある。しかしたとえば

(78) 先生はご用がおりになる。

のように「ある」が「お——になる」という尊敬表現のパターンにはいることができる点を見れば、「ある」の主語が「ご用」ではなくて「先生」であることは明白であろう。「ご用」が主語だったら「先生はご用がある」となるはずだが、これは筆者のイディオレクトでは「先生はここにいる。」などと並ぶものである。ただたしかに「ある」(所有)は「ある」(存在)と

意味上非常に近い関係にある。これは §7 の「こわい」などと同様に、一つの「ある」が対象なしにも用いられてその場合は存在を意味し、対象を持っても用いられてその場合は所有を意味する、と言うべきであろう。しかしそれにしても、この差は単に文脈によって出てくる意味の違いとしてかたづけられることなく、「主語＋ある」と「主語＋対象語＋ある」というパターンの意義素の違いと言うべきであろう。こういうパターンを無視して単にある単語あるいは形式の意義素を求めようとしても的確な記述はできないと思う。

付 記

早大国語学会での発表の約1年後に久野暉氏の“Notes on Japanese Grammar”[『言語の科学』第2号(東京言語研究所, 1970年11月と奥付にあるが実際に出たのは1971年1月25日)]を見た。その§3に本稿で筆者が扱っている「が」への言及がある。またこの少しあとに同氏の“Case-Marking in Japanese”(1967口頭発表の原稿)を見る機会を持ったがその中ではこの「が」が「を」や「に」とともによりくわしく扱われている。久野氏は“「ぼくが Mary が好きだ」«I am fond of Mary»の「Mary」は従来の記述では主語と言われていたがこれは主語ではなく目的語である”と主張され、また“non-stative transitive verbs (状態を表わすのではない他動詞)は目的語の case-marker として「を」をとり、stative transitive verbal forms (状態を表わす他動形式: いくつかの動詞とすべての他動的形容詞および形容動詞)は目的語を mark するのに「が」をとる”ということを論証しようとした。

まず第一の点であるが対象語に「が」を伴わしめる語の存在はかなり前から言われていたことである。これに反対して「主語-が」と「対象語-が」を同一視する説もあるけれども、これを別と考えている人も多いのである。すでに時技誠記『日本文法口語篇』(1950) pp. 276 ff. にこの考えは明言されているし、早稲田大学語学教育研究所『外国学生用日本語教科書初級』(1967)をはじめいろいろな日本語教科書でも「対象語-が」が「主

語-が」とは別に扱われており、また早稲田大学語学教育研究所編『講座 日本語教育』第2分冊(1966) 所載の“日本語の文法——助詞など——”の中で筆者もこれに言及している。

次に第二の点であるが、たしかに対象語に「が」を伴わしめる語は状態を表わす、ということはほとんどの場合に言える。しかし久野氏のようにこれを逆にして言うことができるであろうか。1971年1月末に久野氏とお会いしたとき、「着られる」(可能)、「着たい」(希望)が状態を表わすから「が」をとると言うならば「着てる」は状態を表わすのに「を」をとるのはどう説明するのかうかがったところ、「着る」と「いる」の間に「て」がはいっているからだとのことであった。そうすると「知ってる」も「知る」と「いる」の間に「て」がはいっているからであろうか。「知らない」の「知ら」の部分はどうだろうか。「わかる」は本稿§4で指摘したように基本形と可能形とにまたがっているが、基本形に属する場合は状態を表わすのではないのに対象語に「が」を伴わしめることがあり(例:きのうやっとこの意味がわかった)、§4で指摘したような限られた場合を除いて「が」をとるほうがふつうである。金田一春彦先生が“国語動詞の一分類”[『言語研究』15(1950)]の第二章で“状態動詞”としてあげておられる「要する」は「を」をとるが、「いる」は状態を表わし「要する」は状態を表わさないとと言えるであろうか。「これを格助詞という」「...を...と称する」などの「いう」「称する」は状態を表わさないとと言えるだろうか。「好き」「きれい」「ほしい」「わかる」などが状態を表わすと言うならば「好く」「好む」「愛する」「きらう」「憎む」なども状態を表わすと言うべきではないか。non-stativeの語は「を」をとり stativeの語は「が」をとるということは、大きい傾向としては言えるけれども、これを規則とするとあまりにも例外が多くなる。

形容詞、形容動詞が対象語をとる場合は常に「が」がつき、動詞が対象語に「を」を伴わしめる(すなわち「目的語-を+他動詞」)か「が」を伴わしめるか、あるいはまたほかの助詞を伴わしめるかは語によって決まっ

ている，という考えを筆者はいまも変えていない．そして本稿で筆者は，対象語に「が」を伴わしめる動詞のほとんどが他動詞の可能形に相当するものであること（こう言うほうが，久野氏のような規則を立てるよりも例外が少なくてすむ），ふつう形容詞の中に入れている「ほしい」も実は他動詞の希望形に相当するもので，同じく対象語に「が」を伴わしめる形容詞「こわい」「おもしろい」などとは職能が違うこと，そして対象語に「が」を伴わしめるたくさんの語が，いろいろの共通点と相違点によって関連し合っており，単純に一まとめにしてすませられないことなどを述べたわけである．

補注： 例 16, 17 の深層構造は

16") わたしが[わたしが[彼がうちへ来る]もらう]たい

17") わたしが[わたしが[彼がうちへ来る]○]たい

のように平行的に考えることができる．

原稿を読んで数々のご意見や助言をくださった武部良明先生，辻村敏樹先生，長谷川欣佑さんに感謝の意を表する．